

短 報

# 看取りケアのあり方と 特別養護老人ホームの役割について ～看取りケア向上に向けての取り組みからの一考察～

旭川敬老園\*

山下 真奈・村上 真也  
寺西 明子・田村 稔

キーワード 高齢者の看取り 職員の精神的負担  
老衰死 死生観

## 1. はじめに

近年終末期を迎える場は多様化しており、高齢者の健康に関する意識調査によると、最期を迎えたい場所は自宅、病院に次いで介護施設を希望している（図1）。

また、年次別死亡場所の推移によると、平成17年頃から特別養護老人ホーム（以下特養）のような介護施設での看取り件数が増加している（図2）。

このことは、超高齢社会という時代背景だけでなく、死生観や価値観が変化し、終末期医療や最期を迎える場所を選択する時代になっていると言えるだろう。また、平成18年の介護報酬改定において特養の「看取り介護加算」が創設され、施設等での看取り体制の整備がすすめられてきたことも介護施設で看取りが進んだ背景の一つと言える。

旭川敬老園（以下当園）においても平成17年度から施設内での看取りを始めた。当園での看取りが浸透し、「敬老園で最期までみてもらえる」と安心して家族を任せて頂けるケースが増える一方で、職員にとっては利用者の死に立ち会うことが大きな精神的負担の一要因になっていることが分かった。そのため、「看取り後振り返りカンファレンス」や「ご遺族アンケート」、さらに今年度からは「看取りケア向上委員会」を立ち上げ、看取りケアの質の向上に向けた取り組みを行ってきた。

今回は、これまでの取り組みの中から見えてきた特養の看取りケアのあり方と役割について考察したことを報告する。

## 2. 旭川敬老園における看取りケアの実際

当園は平成20年度から看取り介護加算を導入し、「本人、家族の意思を尊重し、その人らしい尊厳ある看取りを支援すること」を看取りの指針に掲げ、看取りケアに取り組んできた。

社会福祉法人旭川荘（理事長 末光 茂博士）

\* 特別養護老人ホーム

中には、急な状態の悪化により搬送先の病院で亡くなるケースや、園での看取りの意向確認ができないまま亡くなるケースもあるが、園の看取りを希望される家族は年々増加している（図3）。

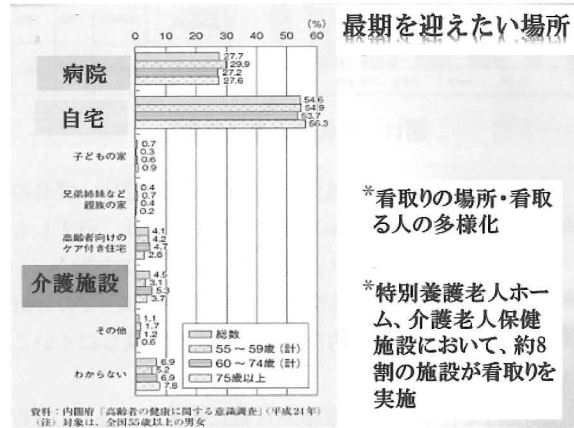


図1 高齢者の健康に関する意識調査

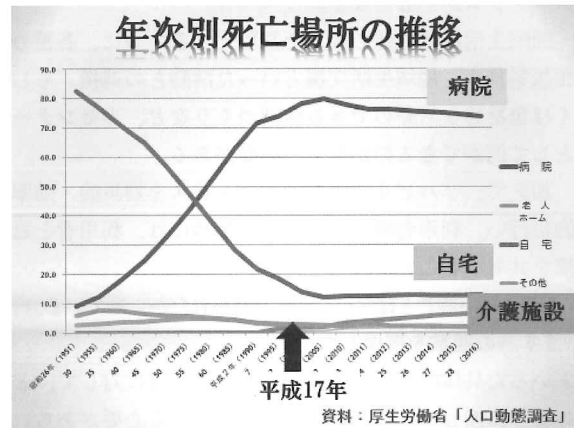


図2 年次別死亡場所の推移

	H20	H23	H26	H29
死亡退所者	18	16	29	18
内、看取り介護になった割合	16.7%	68.8%	72.4%	88.9%

図3 当園の施設内看取りの実際

当園の看取りケアに入るまでの一連の流れは以下の通りである（図4）。

### 1) 入所期

当園の看取りケアに関する説明と今後どのような終末

期(終末期医療ケアを含めた)を希望するか、家族に意向確認を行う。ただし、この時点での意向確認は決定ではなく、いつでも変更できることを伝えている。

2) 安定期

身体的・精神的ケアに努め、その人らしい生活を支援する。

3) 低下期

徐々に機能低下した時に、家族にその都度状態報告と再度看取りの意向確認を行う。

4) 看取り期

状態の悪化が進み、医療的処置を行っても回復が望めない状態と判断された場合を「看取り期」として捉え、医師から家族に対して、予想される経過説明と最終的な看取りの意向確認を行っている。また、医師と家族が面談する場にはできるだけ多くの職種が同席し、家族の思いと看取りまでのケアの方針について情報共有を図っている。当園の看取りに同意が頂けたら、通常のケアプランから看取りのケアプランへ移行している。

看取り期に入ると、職員は家族にできるだけ細目に様子を伝えるなどの配慮を行ったり、緊急連絡先の確認や旅立ちの衣類の準備など家族と一緒に進めている。また、家族が寝泊りできるように居室内にソファを準備したり、好きな食べ物を持ってきて頂いて介助してもらうなど、できるだけ多くの時間を家族と共に過ごせるように配慮している。

3. 看取りケア向上に向けた取り組み

1) 看取り後振り返りカンファレンス

看取りを進めていく中で、死への過程を目の当たりにすることに職員が不安や恐怖を感じていることを知り、平成27年度から「看取り後振り返りカンファレンス」を始めた。

「本人に寄り添った看取りができた」、「家族との関わりの大切さを学んだ」などの肯定的な意見がある一方で、「数多くの看取りを経験しても人が亡くなるのは怖い」、「できれば自分の夜勤の時にあたらないでほしい」、「もっと何かできたのではないか」という意見も多く聞かれた。また、「利用者本人、家族の思いに沿った看取りケアが行えているのだろうか」との声もあった。

「看取り後振り返りカンファレンス」の場で職員それぞれの意見や思いを聞き、共有することで精神的負担の軽減に繋がっていると同時に、看取りを振り返ることで日頃の支援を見直す機会にもなっている。

2) ご遺族アンケート

振り返りの中で「利用者本人や家族の思いに沿った支援ができたのか」という意見から、平成29年度よりご遺族へアンケートをお願いしている(図5)。

これまでに22家族から回答を頂き、「看取り後振り返りカンファレンス」で活用している。

アンケートの中で、「家族全員が臨終に立ち会うことができた」、「病院とは違った雰囲気の中で親族全員が臨終に立ち会えるように環境を作って頂き、静かに息を引いた母は幸せな最期だったと感じている」、「肉親に接するように介護して下さり、母も敬老園に入所し、ここで過ごしたことを喜んでいてと思う」など心温まる言葉を頂いている。

また、当園での看取りを希望した家族のほとんどが、「本人もおそらく安楽で穏やかな最期を望んでいるだろう」と過剰な医療は望まず、施設での自然な看取りを希望していることを改めて知ることができた。

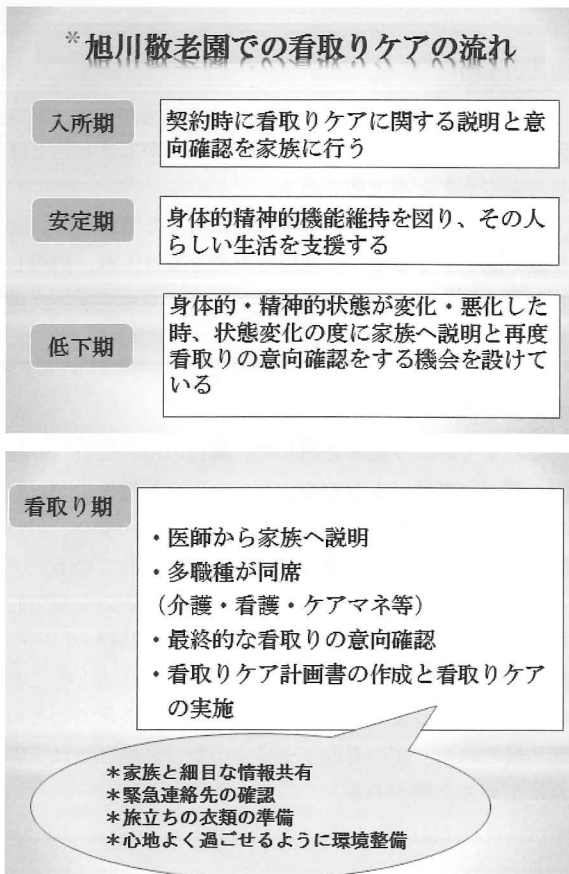


図4 当園の看取りケアの流れ



図5 ご遺族アンケート

一方、意向に沿えなかったこととして、「痰の吸引といった医療ケアにおいて個人差があるように思われた」、「点滴をやめる判断をしたが、タイミングが時期尚早ではなかったか。今でも良い選択だったのだろうかと思う」、「思った以上に急な最期だったので十分みてあげることができなかった」などの声があった。

以前から感謝の言葉は多く頂いていたが、アンケートを実施することでより具体的な思いや意見を知ることができ、職員の精神的ケアやモチベーションの向上、支援の質の向上に繋がっていると実感している。

### 3) 看取りケア向上委員会

平成30年度からは「看取りケア向上委員会」を立ち上げた。月に一回、多職種（園長、副園長、介護、看護、管理栄養士、機能訓練指導員、介護支援専門員等）で集まり、看取りケアの質の向上に向けた話し合いを行っている。

委員会の中で、高齢者施設における看取りについての思いや今後の課題、委員としての役割について意見を出し合った。

高齢者施設での看取りとは、「家族や親しんだスタッフに囲まれて最期を迎えることである」といった意見や、今後の課題については「看取りのマニュアルを作成し、支援の統一を図りたい」といった意見が挙がった（図6）。

職員間で意見交換する中で、それぞれが看取りのあり方や人の死について考え、死生観を持つ機会となっている。

また、外部研修にも積極的に参加する機会を作り、委員会や園内研修で報告する機会を設け、多くの職員と情報共有できるように努めている。そして、看取りへの思いや方向性を統一できるようになっていると実感している。その中で、まずはその人らしい尊厳ある看取りを支援するために看取りケアマニュアルの作成に取り組み始めている。

#### 1) 高齢者の看取りとは

- ・家族や親しんだスタッフに囲まれて最期を迎える
- ・できるだけ安楽に、自然な形で最期を迎えられる

#### 2) 今後の課題と必要と思われること

- ・本人の意思を捉える（知る）
- ・家族も納得した看取りにする
- ・多職種での連携を図り、ケアの意思（方向性）統一をする

#### 3) 委員としての自分の役割、今後取り組みたいこと

- ・マニュアルの作成
- ・職員間での意見や取り組みをまとめ、看取りケアの方向性を示す
- ・看取りの研修等に参加して自分なりの死生観を持つと共に、他の職員と共有する

図6 看取りケア向上委員会

### 4. 生活の場である特養の役割と今後の課題

全国老人福祉施設協議会では、看取りについて「近い

将来、死が避けられないとされた人に対し、身体的苦痛や精神的苦痛を緩和、軽減するとともに人生の最期まで尊厳ある生活を支援すること」と定義している。また、「単なる延命のためではなく、生活の質を向上させ、人生の最終段階まで、本人・家族が望むように生きることを支える」という意味を持つ。

特養は、最期を迎える場所としてだけでなく、老衰という自然の摂理を受容し、人生の最期までを支える大事な役割を担っていると考える。そのためにも、入所時からの利用者・家族との人間関係や信頼関係の構築、看取り期に入ってから細やかな配慮と丁寧で安心できる関わりが必要不可欠であると思う。

当園の看取りケアに関するこれまでの取り組みから見た特養の役割と今後の課題について、以下のように利用者支援、家族支援、職員支援の三つに分けて考えた。

#### 利用者の支援

高齢者の看取り期はそれまで以上に自律した生活の維持が難しくなる。そのため、その人らしい生活やその人が望む生活が最期まで送れるように、利用者や家族の意思確認を行っておくことが大切である。

また、状態の変化に合わせてその都度多職種で集まり、「行っている支援は利用者が望んでいることか」という視点で話し合うことが、最期までその人らしい尊厳ある支援に繋がると考える。

#### 家族の支援

家族に、「利用者本人が納得した人生であった」、「家族自身も悔いなく、納得したケアや関わりができた」と感じてもらうことが大切である。

残される家族が持つ不安や疑問に対して共に考え、繰り返し話をすることで、利用者の死を受け入れ、納得した看取りになるように、利用者本人だけでなく家族支援も行うことが大切である。

#### 職員の支援

これまでの取り組みを通して、職員の精神的負担の軽減に繋がってはいるものの、やはり不安を抱えながら看取りケアに取り組んでいることが分かった。また、職員間で死の受け止め方に違いがあることも感じている。

職員が何に対して不安・恐怖に感じているのか具体的にすることや、看取りケアマニュアルで各職種の役割や業務を明確にすることで、不安解消に繋がればと考えている。また、今後も多職種で情報共有することで個々の死生観を深め、次の看取りや日々の支援に繋がれるように努める必要がある。

## 5. 最後に

「医療に頼らず、家族に見守られながら自然で穏やかな最期を迎えることこそ老衰終末の本来のあり方ではないか」という石飛先生の考え方は、著書「平穏死」のすすめを通して世間に大きな影響を及ぼした。

必要以上に医療処置を行わず、最期まで食べたいものを口から摂取し、いつも過ごしている場所で、家族やなじみの職員に見守られながら、その時が来るまで穏やかに過ごすこと、それこそが自然な看取りであり人間らしい最期だと考える。

最期の時まで穏やかに過ごす姿を見て、利用者の死を受け入れ、家族も職員も納得した看取りができたと思えるように共に看取りに取り組んでいきたい。

## 引用・参考文献

- ・内閣府 平成29年版高齢社会白書 (全国版)  
<https://www.cao.go.jp> (最終閲覧日 H30年12月)
- ・厚生労働省 平成29年度人口動態調査 死亡の場所別にみた年次別死亡数・百分率  
<http://www.mhlw.go.jp>
- ・公益社団法人全国福祉施設協議会 (2015) 看取り介護指針・説明支援ツール
- ・石飛 幸三 (2018) 穏やかな死のために 株式会社さくら舎